

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、7月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（7月）

令和 5 年 6 月 30 日
愛 媛 県

1 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報 6 月 22 日発表（6 月 24 日～7 月 23 日）

〈 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 〉

	平均気温	降水量	日照時間
四国地方	低 10 並 30 高 60% 高い見込み	少 30 並 30 多 40% ほぼ平年並の見込み	少 40 並 30 多 30% ほぼ平年並の見込み

〈 予報のポイント 〉

向こう 1 か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。

2 病害虫の発生予想

水 稻

(1) いもち病（普通期栽培：葉いもち、早期栽培：葉いもち・穂いもち）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 6 月中旬の定点調査では、葉いもちの発生を確認していない。また、育苗期における苗いもちの発生も確認していない。

(イ) 6 月 1 日～25 日までの BLASTAM による葉いもち感染好適及び準感染好適条件の出現は、県内の複数地点で、6 月第 2 半旬に多く認められている（病害虫防除所ホームページ参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 葉いもちの発生は、梅雨期の降雨により増加するので、降雨状況に注意する。

(イ) 窒素質肥料の過用は避ける。

(ウ) 置き苗は葉いもちの発生源になるので、補植後は速やかに除去する。

(エ) 常発地では葉いもち確認後、治療効果のある薬剤で防除を行い蔓延防止に努める。

(オ) 早期栽培では、穂いもちの発生を防ぐため出穂期の基幹防除を必ず行う。

(2) 紋枯病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 6 月中旬の早期水稻の定点調査では、発生を確認していない。

(イ) 昨年、早期及び普通期栽培での発生はやや多であったことから、圃場の菌密度はやや多いとみられる。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 昨年発生が多かった圃場では、特に注意する。

(イ) 早期栽培では、出穂期の基幹防除を必ず行う。

(ウ) 薬剤が株元にかかるように散布する。

(3) セジロウンカ・トビイロウンカ

ア 予報の内容 飛来時期：今後の飛来に注意

発生量：今後の飛来量に注意

イ 予報の根拠

(ア) 県内の予察灯（6 地点）では、両種の飛来を確認していない。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、飛来後の増殖にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 長期残効性のある育苗箱施用剤を処理していない早期水稻では、今後の飛来状況に注意するとともに出穂期防除は必ず実施する。
- (イ) イミダクロプリド等トピイロウンカに対し効果が低下している育苗箱施用剤を処理または育苗箱施用剤を処理していない普通期水稻では、今後の飛来状況に注意する。

(4) コブノメイガ

ア 予報の内容 飛来時期・飛来量：今後の飛来に注意

イ 予報の根拠

- (ア) 県内の予察灯（6地点）での飛来は未確認であり、早期水稻においても発生(被害葉)を確認していない。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、飛来後の増殖にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 本虫に登録のある育苗箱施用剤を処理していない圃場では、今後の飛来状況に注意する。
- (イ) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるため、肥培管理に注意する。
- (ウ) 防除適期は成虫発生最盛期の7～10日後の若齢幼虫期である。

(5) 斑点米カメムシ類（早期・早植栽培）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 6月中旬の掬取り調査では、本田での発生圃場率は並、畦畔の発生地点率は並である。また、捕獲虫数も本田、畦畔とも並である。
- (イ) 予察灯でのアカスジカスミカメの誘殺数は、並～やや少である（病虫害防除所ホームページ参照）。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場周辺の除草を徹底する。出穂直前の除草はカメムシ類を圃場内に追い込む可能性があるため、出穂3週間前と出穂時に2回実施すると効果的である。
- (イ) 出穂時の定期防除で密度を下げ、乳熟期～糊熟期（出穂後10～15日頃）を目安に、地域の防除指針に従い防除する。また、多発時には、さらに7～10日後に追加防除を行う。
- (ウ) 要防除水準は、乳熟期の20回掬取り調査による個体数が大型種で1頭、小型種で3頭である。

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 6月中旬の定点調査では、新葉での発病葉率、果実の発病果率ともに並である。
- (イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 発病果や発病葉は早期に除去し、園地内の病原菌密度の低下を図る。
- (イ) 強風により付傷すると発病が助長されるため、防風垣や防風ネットを整備する。
- (ウ) 発病が認められる園地では、銅水和剤（炭酸カルシウム剤加用）等を散布する。なお、銅水和剤は葉害（スターメラノーズ）が発生する恐れがあるので、気温の低い午前中の散布に努める。
- (エ) 夏秋梢のミカンハモグリガの食害痕は、病原細菌の侵入箇所となるので防除を行う。
- (オ) ‘甘平’、‘はれひめ’等の罹病性品種は注意する。

(2) 黒点病

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 6月中旬の定点調査では、発病果率及び発病度ともにやや多の発生である。
- (イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 枯死枝は早期に除去し、処分する。
- (イ) マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は、累積降水量が200～250mm（または散布後30日）に達した時である。ただし、本病に対して罹病性の高い品種‘せとか’、‘河内晩柑’、‘清見’等の散布間隔は、累積降水量150～180mm（または散布後25日）とする。

(3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の定点調査では、寄生葉率は並、1葉あたり雌成虫数はやや少である。

(イ) 気象予報では、降水量はほぼ年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 園内の早期多発樹で、1葉当たりの雌成虫が平均2～3頭に達した時期が防除の目安となる。

(イ) 薬剤は、かけむらのないよう丁寧に散布する。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の定点調査では、新梢及び果実での発生は確認していないが、一部圃場で新梢での発生を確認している。

(イ) 気象予報では、降水量はほぼ年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 園内をこまめに観察し、発病枝・発病果は早期に除去し園外に持ち出す。

(イ) 梅雨期は発病に好適な時期であり、果実への感染防止のため薬剤防除を徹底する。

(2) うどんこ病

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の定点調査では、発生は並である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ年並とされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 通風、採光を図るとともに、園内の排水を良くする。

(イ) 梅雨期は発病に好適な時期であるため、薬剤防除では薬液が葉裏にもかかるよう丁寧に散布する。

(3) フジコナカイガラムシ

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の定点調査では、発生は確認していない。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 常発園や多発園では、1回目防除の3週間後に2回目を行う。

キウイフルーツ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生拡大注意

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の定点調査では、発病度、発生葉率ともに過去6年間の発生に比べやや多い。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 夏季における発病は、春先と比較して感染・発病は抑制されるものの、新たに病徴が認められたら、発病部位の切除など適切な対処が必要となる。

(イ) 周辺への拡散防止のため、園地見回りによる早期発見と発病部の早期除去を引き続き徹底する。伐採は、平成31年3月改訂の「キウイフルーツかいよう病Psa3型の当面の防除方針」に基づき発病程度に応じて適切に対応する。

(ウ) 7月以降の高温条件下では、果実のしぼみや枝枯症状が認められる。

(エ) 薬剤防除は、コサイド3000等の銅水和剤（薬害軽減のため、炭酸カルシウム剤200倍を加用）を梅雨明けまでに散布する。なお、銅水和剤は薬害を生じやすいので、高温時の日中は散布を控え、雫が落ちないように霧状に散布する。特に黄色系、赤色系では薬害を生じやすいので、散布に十分注意する。

(オ) 強風雨後、既発生園や発病園地の近くでは樹体損傷による感染防止のため、抗生物質剤のアグレプト水和剤1,000倍（使用時期：収穫90日前まで4回以内）、マイシン20水和剤1,000倍（使用時期：収穫90日前まで4回以内）またはカスミン液剤400倍（使用時期：収穫90日前ま

で4回以内)のいずれかを使用する。なお、収穫前日数の関係から収穫の早い赤色系品種では使用しない。

果樹共通 (もも、キウイフルーツ、なし、すもも、かんきつ、かき等)

(1) カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

(ア) 集合フェロモントラップ、予察灯における誘殺数は少ない(病虫害防除所ホームページ参照)。

(イ) ヒノキ毬果結実数が多いことから、今後増加すると思われるが、新成虫の発生時期(7月下旬頃)までは、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 曇天で夜温の高い日や山林に近い園地に集団飛来する傾向があるため、園内への飛来に注意し、飛来確認後は早急に防除する。

野 菜

(1) 黄化えそ病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の定点調査では、発生は確認していない。

(イ) 6月中旬の定点調査では、媒介虫のミナミキイロアザミウマの寄生虫数はやや多である。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生は現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病株は直ちに抜き取り、適正に処分する。

(イ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。

(ウ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。

(エ) 今後、栽培を終了するハウスでは、きゅうりの株元を切断した上でハウスの密閉による蒸し込み処理を行い、媒介虫の夏秋きゅうり(露地栽培)への分散を防止する。

(2) 灰色かび病(夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 6月中旬の定点調査では、夏秋なす・夏秋トマトにおいて発生を確認しており、夏秋なすでは多、夏秋トマトでは並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 過繁茂や軟弱な成育、生理的な葉枯れは発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 発病果や枯死茎葉は早めに除去する。なお、葉枯れ箇所には病原菌の菌叢を生じている場合には、圃場内での病勢が進展しているものと判断される。

(ウ) 耐性菌の発生を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(3) うどんこ病(いちご育苗床)

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 6月の広域調査における育苗床での発生は並である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病は葉裏から始まるため十分に観察し、初期防除に努める。発病によって葉が巻き上がるまで放置しないようにする。

(イ) 発病葉は出来るだけ取り除く。また、薬剤の付着性と通風を良くするため、老化葉を除去する。

(ウ) 薬剤散布に当たっては、展着剤を必ず加用する。ただし、ストロビーフロアブルには、浸達性展着剤(ニーズ、アプローチB I等)を加用しない。

(エ) 薬剤散布では、薬液が葉裏や芽の間隙部までかかるよう丁寧に行う。

(4) 炭疽病(いちご育苗床)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 6月の広域調査では、発生は認められていないが、一部圃場で発生を確認している。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) ランナー、葉柄、小葉に病斑がみられる株は、直ちに除去して伝染源を減らす。
- (イ) 降雨によって胞子が飛散するので、降雨前後の防除を徹底する。
- (ウ) 発病前の防除に重点を置く。

(5) アブラムシ類 (夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 6月以降の黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺数は、調査地点で差があり、松山市では多、西条市では並で推移している(病害虫防除所ホームページ参照)。
- (イ) 6月中旬の調査では、夏秋きゅうりで多、いちご育苗床でやや多、夏秋トマト・夏秋なすで並、さといもでやや少である。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。
- (イ) 定植時にアブラムシ類に登録のある粒剤を施用するとともに、シルバーポリマルチ等の物理的防除を行う。
- (ウ) ワタアブラムシは、一部のネオニコチノイド系薬剤の感受性の低下が認められる場合がある。

(6) ミナミキイロアザミウマ (夏秋なす、夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 6月中旬の定点調査での発生は、夏秋きゅうりでやや多、夏秋なすでは少である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- (イ) 薬剤防除は、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (ウ) 卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。特に多発時には反復散布を必ず実施する。
- (エ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
- (オ) 雑草でも増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。
- (カ) 夏秋きゅうりでは、本虫はメロン黄化えそウイルス(MYSV)を媒介するので注意する。

(7) ハダニ類 (夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 6月中旬の定点調査での発生は、さといもで多、いちご育苗床で並、夏秋なすで少である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。
- (イ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
- (ウ) ハダニ類は雑草でも繁殖するので、圃場内外の除草に努める。

(8) コナジラミ類 (夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 6月中旬の調査では、夏秋きゅうりで多、夏秋なすで並、いちご育苗床で少の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 薬液が葉裏までかかるように、定期的な薬剤散布を行う。
- (イ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
- (ウ) 本虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を徹底する。
- (エ) コナジラミ類には、ウイルスを媒介するものがあるので発生に注意する。

(9) ハスモンヨトウ (大豆、さといも、夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 6月以降のフェロモントラップによる誘殺数は、7地点のうち6地点で、上旬は多く推移した(病害虫防除所ホームページ参照)。

(イ) 6月中旬の定点調査では、さといもでは発生は確認していない。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察を行い被害葉の発生に注意し、若齢幼虫期に防除する。

(10) オオタバコガ (夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 6月以降のフェロモントラップ(5地点)による誘殺数は、並で推移している(病害虫防除所ホームページ参照)。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫や被害果の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(11) シロイチモジヨトウ (夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 6月以降のフェロモントラップによる誘殺数は、4地点のうち2地点で多く推移している(病害虫防除所ホームページ参照)。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ年並とされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病害虫対策 > 愛媛県病害虫防除所
ホームページアドレスは <http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyuboj/index.html>

【農薬使用時の注意】

◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。

◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては使用基準を遵守しましょう。

◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、低毒性農薬を使用しましょう。

◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。

◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫が出現しやすくなるので農薬のローテーション使用を心掛けましょう。

◎農薬の使用にあたっては、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定し、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。

◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容を遵守し、農薬の種類に応じた保護具(防護服、マスク等)を必ず装着しましょう。